

多武峯

〔書言字考節用集〕乾坤多武嶺談山龍嶽談嶺並

〔同〕乾坤談嶺今云多武出太

〔和漢三才圖會〕七十三十市郡

多武峯 一名五臺山 又龍岳 又談山 又談峯 東伊勢高山 西金剛山 北大神山 中央多武

峯有三路 東倉橋五十餘丁 西細川三十七町 北即北山四十一町 但此通路今絕矣

〔多武峯緣起〕中大兄皇子謂中臣鎌足連曰鞍作鞍作者入鹿也暴逆爲之如何願陳奇策中臣連將皇子登于城東倉橋山峯於藤花下談撥亂反正之謀皇子大悅曰吾子房也若至天位改臣姓爲藤原矣仍其談處號曰談峯後用多武二字耳

〔和州巡覽記〕多武タケの峯ミネ 談山かたらいとも云吉野より四里餘細嶺より一里北に在細嶺より北へ流る、

谷は櫻井の方へ下る又道の傍に西より流出る横濱有是多武の峯の入口なり橋ありそれより西へ六町ゆけば多武の峯大職冠鎌足公の神廟有右の峯の下の傍高所に在南面也峯頭にはあらず廟堂門廡皆美麗を極む甚儼然たり社領三千石附り廟前に澗水流る廟後は青山美景也向ひにも青山有兩山の間近し神廟の西に十三重の小塔あり名譽の塔也此下に大職冠鎌足公の遺骨を其長子定慧和向攝津國阿威山アケよりこゝに改葬せらる此事元亨釋書第九卷定慧傳に見えたり右に出たる十三重の塔は唐より取來りし材なり此事又釋書に見えたり定慧は淡海公の兄なり廟の左右とむかひは皆僧坊なり叡山の末寺也多武の峯を出て本の道に付て北へ少下れば町屋有是より麓までの道は峻しからず兩山の間谷岨を漸くに下る道の傍に村里多し多武の峯より五十町下れば多武の峯の鳥居のあと有今は鳥居なし是より多武の峯まで毎町に石表を立て町數を刻む鳥居の跡より櫻井の宿迄十六町有

〔日本書紀〕二十六二年九月於田身嶺冠以周垣田身山名此云大務復於嶺上兩槻樹邊起觀號爲兩槻宮亦曰天宮